の木簡・墨書土器に見える「人給所」「人給」、平安時代の儀式書に見える「人給屋」などともあわせて考察されるべきであろう。また、分かち書きの左側の「□□消息後日参向而語□〔奉カ〕」という文言からは、国司の部内巡行との関わりも想定できるが、当遺跡が越中国や能登国へとむかう交通の要衝に位置していることを踏まえると、この木簡の移動が、果たして、加賀地方の中だけで完結するものなのかは判断が難しい。これらの点について、今後考えを深めていく必要があると思われる。

9　関係文献

㈳石川県埋蔵文化財保存協会『石川県埋蔵文化財保存協会年報六』（一九九五年）

三浦純夫「石川県津幡町加茂遺跡の道路遺構」（『古代交通研究会第四回大会発表資料』一九九五年）

（1～7・9　三浦純夫
8　森田喜久男）

富山・豊田大塚遺跡

1　所在地　富山市豊田本町

2　調査期間　一九九五（平7）五月～七月

3　発掘機関　富山市教育委員会

4　調査担当者　堀沢祐一

5　遺跡の種類　祭祀遺跡

6　遺跡の年代　弥生時代・古墳時代・平安時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

豊田大塚遺跡は、富山市の中心部から北東方向約五kmに位置している。遺跡は、西側約一kmを流れる神通川によって形成された扇状地の中にある微高地上に立地し、標高九mを測る。

（富　山）

豊田大塚遺跡の調査は、店舗建設に先立ち、一五〇〇㎡を対象として実施した。

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて形成された沼・湧水点に関連する遺構と平安時代の

溝が検出された。

弥生・古墳時代の沼跡では、沼肩から約一mの地点で、大量の土器の一括廃棄が見られた。その中には、朱塗土器・手づくね土器が含まれており、水辺で祭祀を行なっていたことを窺わせる。また沼肩の西側の一部が大きくえぐれており、地下水が湧き出ている。ここには、刳り抜き井戸・さらし場があり、そこへ行くための木道も設置されている。この湧水点の東側にも、祭祀に使用されたと思われる土器の一括廃棄がある。

平安時代の溝は、沼地が埋った後に掘られたもので、沼肩から一〇m入ったところにある。溝は幅約三m深さ約八〇cmで、西から東にややカーブしながら流れている。この溝からは、人面墨書土器二点、木製人形四点（文字の書かれた人形を含む）、刀形木製品などの祭祀遺物が出土した。また、土師器椀の底部に「×」と書かれた墨書土器もある。

このように本遺跡は、弥生・古墳・平安時代と祭祀に使用された場所であったと推定される。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「神服小年賀」　176×27×2　061

木製人形の裏面（背面）に墨書されている。表面には、眉・目・口などが描写されている。この人形の形態は、一般的なものとは異なり、脚部の表現がなく、下端が尖っている。胴部左右側面には、下方から切り込みがあり、手と思われるが、明瞭ではない。

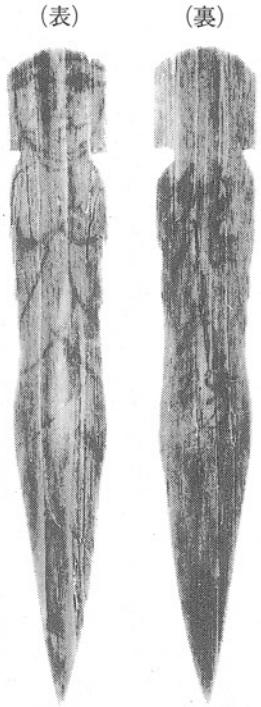
裏面の文字は、「神服（かみはとり）某（なにがし）」という人物名と推定している。人形は、穢を祓う際に使用するのが一般的な用途であるので、その行為を行なう人物が自分の姓名を記したのかもしれない。

なお、釈読については、立命館大学本郷真紹氏、奈良国立文化財研究所館野和己氏、奈良大学水野正好氏にご教示いただいた。

9　関係文献

富山市考古資料館『富山市考古資料館報』二九（一九九五年）

（堀沢祐一）



(1)